Picture-Frustration Study に関する研究 (3)

—実験的先行経験による test score の変動傾向—

上　田　順　一

(昭和33年11月10日受理)

I 問　題

従来，あるテストが臨床的使用に耐えるか否かについて，そのテストのもつ妥当性及び信頼性を検討し，それらの高低に基ずき決定されてきた。そうして，妥当性及び信頼性が高度になるようにテスト材料を改良してきた。このような検討と手続は，テストの客観性を確実に裏ずけるためにとられてきた方向であり，それが果されるためには，測定される対象に，ある期間を通じて，可成り一貫した固定性のあることを前提としなければ成り立たない。テストの信頼性・被験者の固定性について，現実的に問題をとり上げてみると，同一材料による再テスト結果に，著しい変動のあることをしばしば経験することがあるが，この異る二つの結果を臨床的に利用して個人理解に資するとしたら，どのように取扱つたらよいのか。この間の事情は，projective technique に至つては，より深刻な問題となつてあらわれる。

このようにみてくると，被験者の固定性の問題から更に個人の変動性まで把握することが，より dynamic な personality 理解に通ずるのではないかと考えられる。また，刺戟としてのテスト材料と，反応としてのテスト結果という単純な S—R 関係から，Goss, A. E. らのいう広範な S—R 理論の適用への転換が必要となつてくる。われわれは projective technique による personality 診断の新しい試みとして，

1. 再テスト法によるテスト結果の固定と変動の様態を有力な手がかりとする。
2. 再テストに実験的条件を先行させる方法を取り上げてみたいと考えている。

P-F Study についてみると．信頼性に関して，Taylor, M. V. らは評点の六つのカテゴリー間に 0.58～1.0 の信頼度係数を，Rosenzweig S. は 0.34～0.71，Bernard,J. は再テスト法により，六つのカテゴリー，G. C. R. について 0.45～0.73 を得ている。これらの研究結果からもわかるように，信頼度に差の認められるのは，研究者の選んだ被験者の相違による他に，これらの研究では不問に付されている，テスト状況を取巻く諸刺戟の差，ある期間内における被験者の personality 転換の有無によるのではあるまいか。これら二つの要素に疑義をはさむとすれば，臨床的意味からみて，信頼度の検討はそれ自体余り意味のないものといわなければならない。その点，実験的条件下における Lange, C. J. Lindzey, G. E. 及びFrench, R. L. らの研究は示唆に富んでいる。

Lange, C. J. は，実験群，統制群に等しい条件下で先ず P—F を実施し，6週間を経て実験群に対しては24時間の不眠強制をなした後，統制群に対しては普通の状態で再テスト法によりその結果を比較したが，実験群にのみ有意の差を認めた。Lindzey, G. E. も同じく実験群に差のあつたことを報告している。また，French, R. L. は，大学生の優秀群，劣等群を用い，両群に対して学科試験の3週間前と試験終了後の2回，P-Fを実施した結果，劣等群に大きな変動のあつたことを認めている。実施方法に関し，集団実施と個別実施によつて結果に差の生ずることもいわれている。

これらの研究はいずれも，実験的条件下におけるテスト評点の変動を明らかに認めているが，実験的条件に基ずくテスト評点の固定及変動を積極的に取上げて，新しいテスト方法の樹立を目ざしているのではなく，やはりテストの妥当性及び信頼性を検討する補助手段として利用したとみるべきであろう。

先にも述べたように，実験的先行経験を伴う再テスト法によつて，テスト評点の固定，変動を追求するという新しい方式が構成される可能性が生まれてくるし，この事は同時に，他方では難解な personality 構造を操作的に決定するための一方法となるかも知れない。

今回の報告は，このような意図に基いて行われた予備的段階としての若干の結果であるが，直接の目的として，

1. 実験的先行経験として，漫画上映により変動効果が認められるか，
2. テスト評点にどのような変動傾向が認められるか，男女差があるか，

を集団的に処理しようとしたものである。従つて個別的把握にもとずく結果については別の機会にゆずることにしたい。

Ⅱ 実　験　手　続

1. 材料：(1) 住田，林改訂 Rosenzweig P-F Study，日本版（児童用）
　　(2) 16mm漫画フイルム　1巻（約15分）

「マウスの郵便さん」は米国製で登場は動物のみ，言語の使用は全くなく，音楽と物音だけであり，色彩映画ではない。物語の内容は，西部劇風で，鉄道強盗（おおかみ）が度々出現し，誰もが困るが，中でも郵便物と現金がねらわれる。そこで懸賞付で郵送と強盗退治を兼ねた郵便屋（マウス）が募集され，後はこの両者の追いつ追われつのドサクサが展開し，遂に悪が追われ，メデタシメデタシの下り。従つて音響効果も単調なリズム，アクセントが明白で，浮き浮きする調子が多い。特殊な材料とは思われない。

2. 被験者：島根大学教育学部付属小学校第三学年第一組38名を実験群，第二組36名を統制群とした。

3. 手　続：昭和33年7月24日午前9時，各学級毎（各群毎）に普通の状態で第一回のテストを実施し，約8週間後の9月18日午前9時30分第2回のテストを実施した。この際，実験群には予め用意された実験用の漫画映画をテスト直前に見せた。この間，統制群は教室で待機さ

せ（自習）ておいた。両群共に，テストに対しては，積極的に真面目に参加したように観察された。映画に対しては，暗室のため表情などの点は不明であつたが，歓声をあげたり，驚嘆を発したりしていたようで，上映後の質問によつても可成りの興味を与えたと想像される。

4．整　理：実験群と統制群の変動傾向を比較するに当つて，次の項目を取上げた。

(1) 攻撃方向　a 外罰性（E），b 内罪性（I），c 無罰性（M）

(2) 反応型式　a 障害優位型（O-D），b 自己防禦型（E-D），c 要求固執型（N-P）

(3) G，C，R，（集団－致度）

(4) 超自我因子（Superego）　a.$\underline{E}$，b.$\underline{I}$，c.$\underline{E}$+$\underline{I}$．d.E−$\underline{E}$．e.I−$\underline{I}$．f.M+$\underline{I}$．

Ⅲ 結果及び考察

先ず整理にあたつて，男女別の処理をしたが，その間に差のないことがわかつたので，以後一括して行つた。

1．攻撃方向の変動

(1) 外罰性については実験群に変動なく，統制群に僅かの減少がみられた。

(2) 内罰性は両群共に殆んど変化がない。

(3) 無罰性は統制群に著しい増大傾向がみられたが，これは外罰性の変動したものである。

攻撃方向の変動について概括すれば，実験条件は攻撃の方向を変動するに至らず，むしろ無罰性の増大を抑止せしめている。

2．反応型式の変動

(2) 障害優位型については実験群に僅かの増大傾向がみられた。

(2) 自己防禦型は実験群に僅かの減少傾向がみられた。

(3) 要求固執型は両群に差なく，共に減少傾向がみえた。

反応型式の変動についてみると，全般的に実験条件の影響は考えられない。

3．G，C，Rの変動両群共に増大しているが，僅かに実験群が劣つている。

以上，評点カテゴリー別及びG．C．R．を通じて，実験条件による大きな変動はみられなかつたが，無罰方向の増大が抑止されたこと，G．C．R．評点の増大抑止は，これら因子の特性から，発達上好ましくない効果をもたらしたといえる。

4．超自我因子の変動

(1) $\underline{E}$　統制群に著しい減少傾向がみられたのに対し，実験群には殆んど変動がみられなかつた。この因子は，自分に罪，責任のあることを攻撃的に否定する反応で，その点．実験条件が減少傾向を抑止したとみられる。

(2) $\underline{I}$　両群間に著しい差を生じた。この因子は，自分の罪を認めながらも言いわけの形をとつて本質的には非を認めない反応で，実験条件が増大傾向を抑止したと考えられる。

(3) E—$\underline{E}$　実験群に著しい減少傾向がみられた。この因子は他をとがめ，敵意をもつといつた直接的な敵対攻撃の反応である。先に攻撃方向外罰性（E）には，処理上$\underline{E}$が含まれていた

ので，普通の意味に用いる外攻性は減少したとみるべきである。

(4) I－$\underline{I}$　両群共に減少傾向がみえるが，その間に差はみられない。

(5) M＋$\underline{I}$　これは前述のMと$\underline{I}$の計であるところから，必然に大きな差をもたらし，実験群に増大抑止の傾向がみられた。この因子は，自他をうまく弁護し調整する反応で，社会性発達の尺度とされているものである。

以上，超自我因子の変動を通じてみると，$\underline{E}$，$\underline{I}$，E－$\underline{E}$，M＋$\underline{I}$の各因子について両群間に大きな差のあることがわかつた。これは実験条件が，敵意を減少させ，自己調節，自己主張，社会性の増大を抑止しているものと解釈される。

第1表　評点カテゴリー別及びG．C．Rの変動（%）

群 / 回	E		I		M		O—D		E—D		N—P		G.C.R.	
	統制	実験	統制	実験	統制	実験	統制	実験	統制	実験	統制	実験	統制	実験
Ⅰ	54.46	51.04	18.10	20.34	27.44	28.62	15.43	13.38	58.12	58.99	26.45	27.63	32.06	33.55
Ⅱ	49.64	51.10	18.35	19.93	31.99	28.96	15.68	14.37	58.93	58.31	25.37	27.31	37.08	37.83
変　動	4.82	0.06	0.25	0.37	4.55	0.34	0.25	0.99	0 25	0.68	1.08	0.32	5.79	4.28
変動指数	91.15	100.12	101.38	97.98	116.58	101.19	101.62	107.04	101.39	98.85	95.52	98.84	118.06	112.71

註 1)　%算出……攻撃方向，反応型式別に個々の評定の占める割合

2)　変動指数……$\frac{\text{第Ⅱ回結果}}{\text{第Ⅰ回結果}}\times 100$

第2表　超自我因子の変動（%）

群 / 回	$\underline{E}$		$\underline{I}$		$\underline{E}$＋$\underline{I}$		E－$\underline{E}$		I－$\underline{I}$		M＋$\underline{I}$	
	統制	実験	統制	実験	統制	実験	統制	実験	統制	実験	統制	実験
Ⅰ	13.75	9.81	5.37	7.46	19.08	17.70	16.94	17.74	7.02	9.59	32.71	36.07
Ⅱ	10.45	9.75	7.84	6.94	18.29	16.69	15.39	12.06	6.91	9.31	39.84	34.80
変　動	3.30	0.06	2.48	0.52	0.78	0.01	1.55	5.64	0.11	0.28	7.13	1.27
変動指数	76.00	99.39	146.00	93.03	95.86	99.94	90 85	68.14	98.43	97.08	121.80	96.48

註 1)　$\underline{E}$，$\underline{I}$……$\frac{\underline{E}\text{又は}\underline{I}}{\text{有効反応数}}$

Ⅳ　要　　約

1．われわれは，personality のより dynamic な把握方式として，実験的条件を先行させた再テスト法によつて得られるテスト結果の固定，変動の様態に注目することを提案し，その予備的研究を行つた。

2．対象として小学校三年生男女を用い，実験的先行経験として漫画映画を上映してみせた。

3．結果として，男女差はみられなかつた。

4．攻撃方向の変動については無罰性の増大抑止の傾向がみられた。

5．G，C，R，にも増大抑止の傾向がみられた。

6. 超自我因子の変動では，Eの減少抑止，$\underline{I}$及びM＋$\underline{I}$の増大抑止，最も著しい変動をみせたのは，E－$\underline{E}$の減少傾向であつた。

7. これらの諸結果を綜合的に解釈すると，実験的条件は，敵意，自己調節，自己主張，社会性の増大を抑止するという発達上好ましくない変動を与えたとみることができる。

8. 今後の問題として，(1)各因子別（E′，I′，M′，E，$\underline{E}$，I，$\underline{I}$，M，e，i，m）変動の追跡，(2)変動児童と固定児童の比較などの問題を引続き研究し，併せて，実験的先行条件を確実にし，将来，臨床的利用にこの方式が大きな役割を果すようにしたいと考えている。

Ⅴ 参　考　文　献

(1) 住田勝美．林　勝造：絵画一欲求不満テスト解説，児童用　昭31．三京房

(2) Taylor, M. V. and O. M. : Internal consistency of the Group Conformity Rating of Rosenzweig P-F Study. J. consult. Psychol. 1951.15

(3) Bernard, J. : The Rosenzweig Pictur-Furstration Study : Ⅰ. Norms, reliability and statistical evaluation. Ⅱ. Interpretation. J. Psychol. 1949 28.

(4) Lindzey, G. E. : An experimental test of the validity of the Rosenzweig P-F Study. J. Personality. 1950 18.

(5) French, R. L. : Changes in performance on the Rosenzweig P-F Study following experimentally induced frustration. J. consult. Psychol., 1950.14

(6) Goss, A. E. and Brownell, M.H. : Stimulus-Response concepts and principles applied to projective test behavior. J. Personality. 1957.25

(7) 上田順一：Picture-Frustration Study に関する研究(1)　昭31．島根大学論集（教育科学)6.

(8) 上田順一：Picture-Frustration Study に関する研究(2)　昭32．島根大学論集（教育科学)7.

(9) 上田順一：実験的先行経験が Projective test 反応に及ぼす影響について，昭33．中国四国心理学会講演抄録．15.